

The Distribution of the Shigaraki Ware Mortar in the Middle Age Iga

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/45104

信楽焼播鉢から見る中世伊賀の流通について

水谷 侃司

(名古屋大学大学院文学研究科)

I. はじめに

信楽焼は現在の滋賀県甲賀市信楽町にて生産された陶器で、13世紀半ば頃にその生産を開始したとされる〔畑中 2007: 112 頁〕。その消費地における分布は開窯期には近江南部などの狭い地域に限られていた。その後、常滑や備前などの勢力を抑えて徐々にその分布域を広げていくこととなる。

生産地に隣接する伊賀では早い段階から信楽焼の播鉢を受容し続けている地域であり、その流通の変化を捉えるには絶好の場所である。それにも関わらず、伊賀地域における研究が遅れているというのが現状である。

本稿では、伊賀地域出土の信楽焼播鉢の集成を行い、その分布及び年代差から、中世¹⁾伊賀地域における、信楽焼の流入状況について考察する。

II. 研究史

伊賀地域における信楽焼に関する研究は少なく、未だ研究の開始段階にあたる。以下、その主な研究についてまとめた。

1987年、井上喜久男は伊賀地域出土の信楽焼を集成し、瀬戸窯並行で編年を作成した〔井上 1987〕。

1990年、山田猛は下郡遺跡出土播鉢を口縁形態の変化から伊賀地域における信楽焼播鉢の編年を作成した〔山田 1990〕。また、信楽とは異なる軟質の陶器に関して、伊賀での生産の可能性について言及した。

2003年、畑中英二は信楽が開窯期より伊賀に流通していることを示し、13世紀から16世紀における遺跡での出土状況から甕・壺・播鉢のシェアの大部分を占めているとした〔畑中 2003〕。また、伊賀における陶器生産はなかったか、あっても信楽の影響を強くうけているため、広義の信楽焼にするべきであるとしている。

以上の研究史を踏まえ伊賀地域における現状での研究課題として、以下の2点を指摘する。

1点目は流通構造を解明することである。これまで窯跡調査が少なかったこともあり、消費地を主とした研究が行われてきた。しかし、各地域において具体的にどのような流通経路が用いられ、時期によってどのような差異が出るのかについては論じられていない。流通の全体像を把握するためには各地域における流通の実態を把握することが必要である。

2点目は伊賀焼との関わりを明らかにすることである。現時点で伊賀地域において五位ノ木窯跡などの例外を除いて中世の段階で陶器生産が行われていた証拠は見つかっていない。しかし、山田氏が指摘するように、信楽とは胎土や成形が異なる陶質の播鉢が存在している〔山田 2013: 14 頁〕。これらの型式分類・分布調査を行い、従来言われている信楽焼播鉢や大和産陶質陶器播鉢と比較することによってその実態を把握できる。同時に伊賀地域における中世陶器生産の有無を明らかにすることも必要である。

本稿の目的は1点目の課題である中世伊賀地域における信楽焼の流通経路を明らかにすることである。そのためにまず、出土遺跡の分布図を作成し、型式編年より時期を特定した。作成した分布図を基に、伊賀地域において信楽焼播鉢がどのように分布したのか年代ごとにまとめ、その流通について考察した。

III. 地理的環境 (図1)

伊賀地域は三重県西部の伊賀市及び名張市の範囲を指し、滋賀県・京都府・奈良県と県境を接している。この地域は旧国の伊賀国に相当する。四方を山に囲まれた盆地である。伊賀を流れる主な河川はすべて淀川水系で木津川・柘植川・服部川・久米川・名張川・宇陀川などがある。これらの河川は木津川に合流し、京都府を経て、大阪湾に流出している。三重県内の河川では伊賀地域の河川のみが紀伊半島西部に流出しており、その他の地域では紀伊半島東部の伊勢湾や熊野灘に流れ出している。伊賀国と伊勢国との境にある鈴鹿

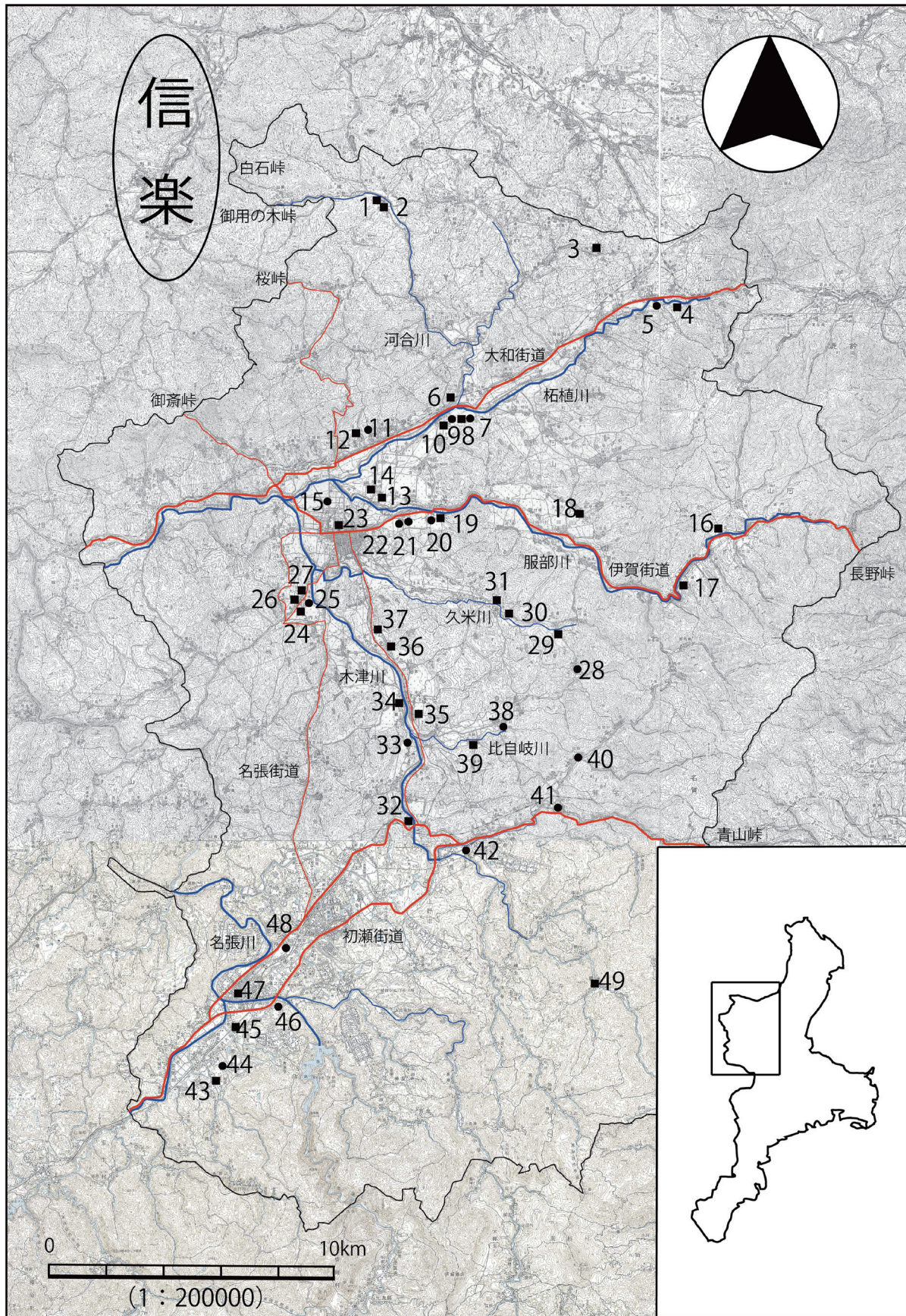


図1. 信楽焼播鉢出土遺跡分布図 (■は城館跡、●はその他の遺跡。)

山脈・布引山地などが分水嶺となっている。そのため、伊賀地域は三重県内の他地域より、関西地方の諸地域と地理的結びつきが強い地域であると言える。

伊賀地域には大和街道・伊賀海道・初瀬街道の三つの主要な街道が通っている。古代からこれらの道は畿内と伊勢を結ぶ交通路として栄えてきた。

大和街道は山城国笠置（現・京都府相楽郡笠置町）から木津川沿いに伊賀国島ヶ原（現・伊賀市島ヶ原）を経て、上野台地に至り、柘植川沿いに東進し、加太峠を越え鈴鹿郡関宿（現・三重県亀山市関町）へと通じている。江戸時代にはこの街道は大和国諸大名が参勤交代に利用している。『三国地誌』²⁾においては「東國路」と記載されている。

伊賀街道は古くは伊賀越奈良街道と呼ばれ、大和・山城方面から伊勢神宮に参拝するための道として用いられていた。上野台地において大和街道から分岐し、服部川沿いに東進し、長野峠を越え、伊勢国（現・三重県津市）へと至る。1608年、津藩の藤堂高虎によって整備された。

初瀬街道は大和国初瀬（現・奈良県桜井市初瀬）から伊賀国名張（現・名張市）、伊勢路を経て青山峠を超え伊勢国山田（現・三重県伊勢市）を結ぶ道として整備され、伊勢神宮への参拝や、齋宮の下向・帰京に利用された。

この他に京街道（信楽道）という京都から近江国信楽小川・多羅尾（現・滋賀県甲賀市信楽町）を経て御斎峠を越え伊賀国新居に入る道もある。この道は新居で大和街道に接続するとともに、名張街道及び木津川との連絡も便利である。また、信楽小川から桜峠を越え丸柱に至る道もある。丸柱から諏訪を経て三田へと至る峠道は三田坂と呼ばれている。

IV. 編年

1. 型式分類

信楽焼にはいくつかの編年が存在する。本稿では、伊賀地域出土の播鉢から作成された、山田猛氏の編年を使用する(図2)。以下でその編年を詳しく見ていく。山田氏は伊賀市下郡にある下郡遺跡より出土した信楽焼播鉢を資料として型式分類を行った[山田 1990: 67頁]。その際、型式分類の規定要素を口縁部形態に求め、播目や色調、焼成などは副次的要素としている。これは、信楽焼においては施条具が篋状具から櫛状具

へ、櫛状具も多条化し密になるという変化は漸移的なものであるとともに他地域の技術的影響という他律的变化もあり、型式細分の規定要素としては不相当と考えたからである[山田 2013: 12頁]。

1) I 型式

口縁部が丸みを持って尖り外反しない類。捏鉢が大半分だが篋状具や櫛状具による播目を持つ播鉢も同時併存する。概して乳白色を呈し、軟質で厚手としている。片口鉢の製作技法が常滑焼と異なること、常滑写しの甕が共伴しないことなどから14世紀前葉に属する。

2) II a 型式

口縁部がゆるく外反し平坦面を構成しない類。乳白色で軟質なものが多い。櫛状具による1単位3～5本の播目を有するものもあるが捏鉢が主体をなす。常滑写してはいる器形を含み、応永二(1395)年銘甕と同時期であり、14世紀中葉～後葉に属する。

3) II b 型式

口縁部が外反し内面に平坦面を構成する類。平坦面が内面にある内面系がある。黄茶色を呈し、厚手で軟質なものが多い。櫛状具による1単位3～5本の播目を有するものを含むとしている。奈良県山辺郡山添村北野腰越遺跡で出土した15世紀前葉の瓦器と共伴しているため15世紀前葉に属する。

4) III a 型式

口縁部の平坦面の内側に稜を形成する類。茶黄色を呈し、やや硬質のものが多い。櫛状具による1単位5本の播目を有する。長禄二(1458)年銘播鉢と同型式であるため15世紀中葉～後葉に属する。

5) III b 型式

強いロクロナデの結果、平坦面が全体に凹面となった類。茶黄色を呈し、硬質で薄手。櫛状具による1単位5本の播目を有する。文明10(1478)年から天文元(1532)年まで存続した寺内町である京都市の山科寺内町遺跡で出土しており16世紀前葉に属する。

6) IV a 型式

口縁端面の窪みが内側に集約されて凹線状を呈し、外側肩に稜が立たず、緩やかに膨らみに移行する類。茶褐色を呈し、硬質で薄手。櫛状具による1単位5本の播目を有する。天文元(1532)年から永禄十一(1568)年まで存続した観音寺城跡から出土しているため16世紀中葉に属する。

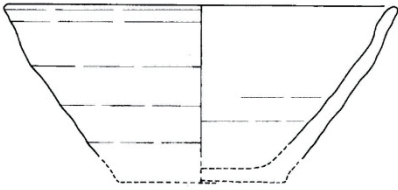
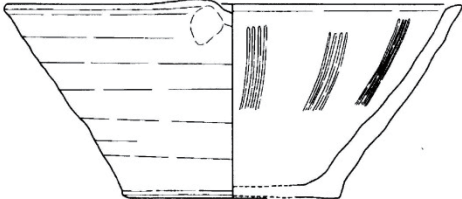
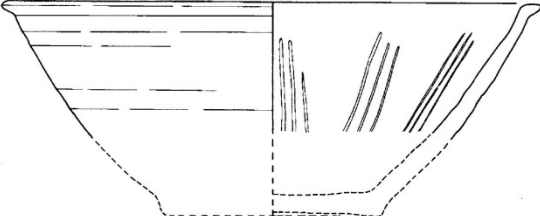
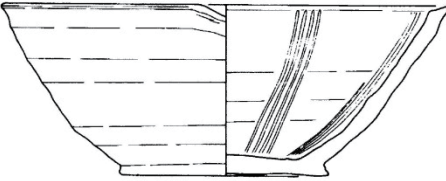
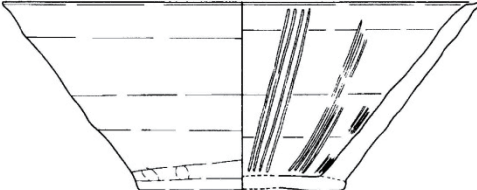
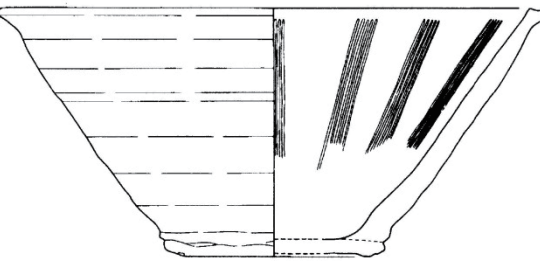
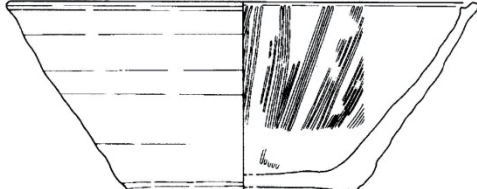
実年代	型式	典 型 例	器種	播目		色調	焼成	器厚
				本数	間隔cm			
1300	I		練鉢	(クシ3)	(7.5)	(乳白)	(軟)	()
1350	II a			(ヘ)	(4)	(白)	()	(厚)
1400	II b		ラ	(クシ3.5)	(5.4)	(黄)	(やや軟)	()
1450	III a		播鉢	()	(3)	(茶)	(やや硬)	()
1500	III b			クシ5	(5.4)	()	()	()
1550	IV a		鉢	本主体	(3.1)	(茶褐)	(硬)	(薄)
1600	IV b			()	(2.1)	()	()	()

図 2. 信楽焼播鉢型式編年図 [山田 2013 : 13 頁]

7) IV b 型式

口縁端部の内側に集約された凹線の両肩に稜が立ち、底部に播目を持つ類。茶褐色で薄手。楯状具による1単位5本の播目を有する。天正伊賀の乱(1579・1581)後から近世的鉄泥の持つ播鉢の出現以前とし、16世紀後葉に属する。

2. 軟質播鉢について

山田氏は上記の信楽系陶器とは別に、軟陶播鉢とする系統の播鉢の存在を指摘している。色調はくすんだ灰黄色を呈し、胎土には雲母片を多く含むが長石は目立たない。播目は多条の楯状具で搔上げている。外面に明瞭なロクロナデはなく、ハケメが見られる。播目は大和の瓦質播鉢に類似するが焼成は甘いものの陶質であるとしている。これについて山田氏は大和産瓦器や信楽産陶器の影響を受け、伊賀地域の平地で生産された播鉢である可能性があると指摘している〔山田2013:14頁〕。

筆者は実見していないので本稿においては詳しい検討を避けるが、伊賀地域における陶器研究において重要な課題の一つとして今後扱っていく必要がある。

3. 山田編年の再検討

山田編年ではI a型式より楯状具による施条が行われていたとしている。しかし、伊賀地域出土信楽焼播鉢の山田編年に基づく型式分類と播目の施条方法を検討した結果、型式と施条法関連表(表3)にあるようにI a型式、II a型式には楯状具によって施条されたものはなく、II b型式以降に出現することが分かった。生産地においても、開窯期の窯跡である黄瀬イシヤ窯跡からは捏鉢のみの出土が出土している〔片山2005〕。つまり、開窯期は捏鉢のみ生産が行われ、その後も捏鉢もしくは篋状具による施条が行われる播鉢、後出する形で1単位あたり4本から5本の播目を持つ播鉢が出現すると考えることができる。つまり、信楽焼の捏鉢及び播鉢には大まかに捏鉢→ヘラ状具施条播鉢→楯状具施条播鉢の順序がある。しかし、これはあくまでも目安であり、II a型式やII b型式のように複数の施条方法が並行して採用されている時期もある。III b型式以後はもっぱら1単位あたり4本から5本を主とする播目を持つ播鉢が生産されるようになったようである。ただ、山田氏が指摘したように播目を

持って型式分類の規定要素とするのは危険であると思う。しかし、型式分類を補助するために播目を用いることは一定程度認めることができるだろう。

以上のように細部において検討の余地があるものの、大枠に変更はなく、本稿においては山田編年に基づき論じることとする。

V. 伊賀地域における信楽焼播鉢の分布

本章では現在筆者の確認している伊賀地域における信楽焼播鉢の出土遺跡について概観してみる。

1. 時期別分布

伊賀地域においては49遺跡から信楽焼播鉢の出土が確認されている。信楽焼播鉢出土遺跡分布図(図1)を基に以下でそれぞれの分布状況を年代別に見ていく。なお、信楽焼播鉢出土遺跡分布図(図1)、で用いた番号と伊賀地域信楽焼播鉢出土遺跡一覧表(表1)及び、出土信楽焼播鉢形式分類表(表2)の番号は対応している。

1) I 型式期

この時期は木津川流域の青ノ代遺跡、下り合遺跡においてわずかながら信楽焼捏鉢の出土を確認することができる。出土点数が少ないので、断定することはできないが、一部の地域において、信楽焼の需要が始まった段階にあたと想定される。ただ、伊賀地域に広く流通するのは次の段階になってからである。

2) II a 型式期

この時期は伊賀地域に信楽焼播鉢が本格的に流通し始めた時期である。信楽から距離的に近い伊賀北部に多くの遺物を出土する遺跡が集中するというわけでもなく、伊賀南部においても北部と同様に一定数の出土量を確認することができる。このことは地域による流入の差異は少なく、短時間に分布域を拡大したことが分かる。傾向として柘植川および木津川の流域に多くの遺跡が集中している。

3) II b 型式期

この時期は信楽焼播鉢の出土数量が大きく増加する時期である。特に荒木氏館、宮ノ前遺跡をはじめとする服部川流域の地域においては前段階では出土していなかったのに対し、この時期には多くの遺物が出土するようになる。また、伊賀南部においても多くの遺物が出土するようになる。この時期は信楽独特の窯形態

表 1. 伊賀地域信楽焼播鉢出土遺跡一覧表

遺跡名	所在地	立地	性格	年代
1 杉田氏城跡	伊賀市横山字門出	丘陵	城館跡	15～16世紀
2 谷出北城跡	伊賀市横山字門出	丘陵	城館跡	中世
3 菊永氏城跡	伊賀市上友田字向出	丘陵	城館跡	中世・近世
4 福地氏城跡	伊賀市柘植町	河岸段丘	城館跡	16世紀
5 野添遺跡	伊賀市野村字野添	河岸段丘	集落跡	室町・江戸
6 恒岡氏城跡	伊賀市円徳院字東山	丘陵	城館跡	古墳・奈良・室町
7 堂垣内・大多田遺跡	伊賀市佐那具町字堂垣内・大多田・澤	河岸段丘	集落跡	古墳・奈良・平安・室町・江戸
8 堂垣内遺跡	伊賀市佐那具町字堂垣内	河岸段丘	城館跡	15～16世紀
9 三反田遺跡	伊賀市佐那具町字三反田	河岸段丘	集落跡	弥生・古墳・鎌倉・江戸
10 法華堂西館跡	伊賀市佐那具町字法華堂	平地	城館跡	古墳・奈良・平安・鎌倉・室町・江戸
11 火山遺跡	伊賀市山神字火山	河岸段丘	生産遺跡	室町
12 森庵遺跡	伊賀市大谷	河岸段丘	集落跡	古墳・平安～室町
13 蓮花寺跡推定地遺跡	伊賀市服部町字中ノ坊	沖積地	城館跡	弥生・古墳・室町・江戸
14 箕升氏館(北城遺跡)	伊賀市羽根	沖積平野	城館跡	16世紀
15 泥畑遺跡	伊賀市小田町字泥畑	低湿地	散布地	中世・近世
16 風呂谷館跡	伊賀市富永字風呂谷	舌状尾根	城館跡	古墳・平安・鎌倉・室町・江戸
17 野中城跡	伊賀市下阿波字野中	河岸段丘	城館跡	中世
18 米野氏城跡	伊賀市平田字大ヶ森	平地	城館跡	弥生・室町
19 荒木氏館跡	伊賀市荒木	河岸低地	城館跡	平安～鎌倉・近世
20 宮ノ前遺跡	伊賀市上荒木	河岸低地	集落跡	古墳・奈良・中世・近世
21 西明寺三反田	伊賀市西明寺	沖積地	集落跡	中世・近世
22 有井遺跡	伊賀市西明寺	沖積地	集落跡	奈良・平安・中世・近世
23 上野城跡	伊賀市丸ノ内	台地	城館跡	室町・江戸
24 婦毛遺跡	伊賀市大野木字婦毛	自然堤防	集落跡	近世
25 清水北遺跡	伊賀市大野木字清水	河岸段丘	集落跡・城館跡	縄文・中世
26 神ノ木館跡	伊賀市大野木字神ノ木	河岸段丘	城館跡	中世
27 木津氏館跡	伊賀市大野木字高ノ畑	河岸段丘	城館跡	中世
28 青ノ代遺跡	伊賀市高山	谷底平野	集落跡・城館跡	古墳・奈良・平安・鎌倉・室町
29 安場氏館跡	伊賀市喰代字和田	支盆地	城館跡	鎌倉・室町
30 塚本館跡	伊賀市界外字塚本	河岸段丘	城館跡	中世・近世
31 安田氏館跡	伊賀市界外字北浦	河岸段丘	城館跡	中世・近世
32 比土遺跡	伊賀市比土字東賀柳	丘陵裾部	集落跡	旧石器・縄文・奈良・平安・室町
33 浮田遺跡	伊賀市神戸	河岸段丘	墓地・集落跡	弥生・古墳・奈良・平安・鎌倉・室町
34 下郡遺跡	伊賀市下郡	河岸段丘	集落跡・城館跡	弥生・古墳・鎌倉・室町・江戸
35 高田氏館跡	伊賀市沖字深町	沖積地	城館跡	室町・江戸
36 城山城跡	伊賀市依那具字西田	丘陵	城館跡	古墳・鎌倉・室町
37 小泉氏館跡	伊賀市依那具字柳田	平地	城館跡	弥生・古墳・中世・近世
38 石神塚	賀市摺見字一ノ井	丘陵	古墳	古墳・中世
39 下り合遺跡	伊賀市比自岐	丘陵麓	城館跡	鎌倉・室町
40 川南D遺跡	伊賀市勝地字川南	河岸低地	集落跡	古墳・中世
41 伊勢路道筋遺跡	伊賀市伊勢路	小盆地	集落跡	鎌倉・室町
42 上後瀬遺跡	伊賀市青山羽根字上後瀬	小盆地	集落跡	中世
43 滝野氏城跡	名張市赤目町一ノ井字堂之前	段丘	城館跡	縄文・古墳・室町
44 檀・柏原遺跡	名張市赤目町字柏原	沖積平野	集落跡	縄文・弥生・平安・鎌倉・室町
45 観音寺遺跡	名張市中村字観音寺	丘陵	集落跡・城館跡	弥生・奈良・鎌倉・室町
46 糸川橋遺跡	名張市夏見字下出	沖積地	集落跡	縄文・古墳・飛鳥・奈良・室町
47 名張藤堂家邸跡	名張市丸ノ内	河岸段丘	屋敷跡	室町・江戸
48 小谷遺跡	名張市蔵持町芝出字小谷	台地	集落跡	室町
49 霧生城跡	伊賀市霧生字中切	山地	城館跡	中世・近世

である、いわゆる「双胴式窖窯」である釜ヶ谷窯跡・南松尾窯跡の操業期の間であり、同様に「双胴式窖窯」で操業が行われていたと想定される。この「双胴式窖窯」は焼成室長・焼成室面積が拡大していく傾向にあることが判明している[畑中 2007: 96 頁]。消費地である伊賀地域においても生産地である信楽の生産規模の拡大により流通数量が増加したのである。

4) III a 型式期

この時期は信楽焼播鉢の出土数量が最も多くなる。伊賀北部、南部ともに多くの遺跡に分布していることが分かる。また、出土する遺跡の大半は中世城館となっている。ただ、この型式に充てられている年代幅が広いために出土数量が最大になるものの傾向としては前型式期と似たような割合になる。

表 2. 出土信楽焼播鉢型式分類表

	遺跡名	I 型式	II a 型式	II b 型式	III a 型式	III b 型式	IV a 型式	IV b 型式	不明	計
1	杉田氏城跡			1	8	1			1	11
2	谷出北城跡								1	1
3	菊永氏城跡				8	6	2	1	11	28
4	福地氏城跡				6	4	2		6	18
5	野添遺跡		2							2
6	恒岡氏城跡			1						1
7	堂垣内・大多田遺跡			1						1
8	堂垣内遺跡		1	4	4		1		10	20
9	三反田遺跡			1	1		1		1	4
10	法華堂西館跡		1		2				3	6
11	火山遺跡		1				2		5	8
12	森庵遺跡				2	1		1	3	7
13	蓮花寺跡推定地遺跡		1	5	2	4	1		19	32
14	箕升氏館（北城遺跡）						4	3	2	9
15	泥畑遺跡								4	4
16	風呂谷館跡			2	1				2	5
17	野中城跡								1	1
18	米野氏城跡				1				3	4
19	荒木氏館跡			6	6	1	2	4	4	23
20	宮ノ前遺跡			6	3	1	2	1	3	16
21	西明寺三反田		1	5					1	7
22	有井遺跡			1						1
23	上野城跡			1	3				6	10
24	婦毛遺跡								2	2
25	清水北遺跡		1	5	3		1		9	19
26	神ノ木館跡			1	3	3	2	4	3	16
27	木津氏館跡						2	2	4	8
28	青ノ代遺跡	1			2	1		1	3	8
29	安場氏館跡			1	1	1				3
30	塚本館跡				5	3				8
31	安田氏館跡		2		4	1	1		3	11
32	比土遺跡		2		1				7	10
33	浮田遺跡				1					1
34	下郡遺跡		1	14	18	11	8	1	14	67
35	高田氏館跡			1					1	2
36	城山城跡			2					1	3
37	小泉氏館跡		1	6	4	11	2	3	2	29
38	石神塚			1						1
39	下り合遺跡	1		1	2	1			2	7
40	川南 D 遺跡			1						1
41	伊勢路道筋遺跡			1					1	2
42	上後瀬遺跡								1	1
43	滝野氏城跡		1	1	1		1		5	9
44	檀・柏原遺跡							1		1
45	観音寺遺跡			4	3	2	1	1		11
46	糸川橋遺跡				1	1				2
47	名張藤堂家邸跡			1	1			3		5
48	小谷遺跡		2	3	1	1				7
49	霧生城跡							1	2	3
	計	2	17	77	98	54	35	27	146	456

5) III b 型式期

この時期は柘植川流域、服部川流域の遺跡における出土数量が減少する現象が見られる。反面、木津川流域、久米川流域においては前型式期と同様に一定の出土数が確認できる。そのため全体として出土数量の減少がみられる。近江などの他の地域では信楽焼は常滑焼を駆逐し、次第にその版図を拡大していくことが分

かっているのに対して、伊賀ではIII a 型式期を一つのピークとして出土数量が減少する傾向にあるのは興味深い事実である。これは生産地である信楽というよりもむしろ、消費地である伊賀地域において何等かの変化があったのではないかと考える。

表 3. 型式と施条法関連表

	施条なし	匏状具	櫛状具	不明	計
I 型式	2				2
II a 型式	8	8		1	17
II b 型式	9	6	53	9	77
III a 型式			91	7	98
III b 型式			50	4	54
IV a 型式			34	1	35
IV b 型式			23	4	27
不明	15	7	103	21	146
計	34	21	354	47	456

6) IV a 型式期

この時期は伊賀地域全体で出土数量が減少する傾向が見られる。特に伊賀南部では出土の確認できる遺跡が著しく減少している。生産地である信楽では双胴式窖窯などの発明により生産の規模を拡大させていき、近江を南から北に向けて着実に需要を拡大しているのに対し、古くからの顧客である伊賀地域においては生産の拡大に見合った出土数の増加が見られないばかりかむしろ減少傾向にある。播鉢などの調理具は甕や壺といった調理具に比べ、耐久性に劣る部分がある。そのため、使用しているのが壊れると随時新しい品を入手する必要があるのである。それにも関わらず、その出土量が年々減少傾向にあるというのは奇妙な現象である。

7) IV b 型式期

この時期も前段階から引き続き出土数量が減少する傾向が見られる。天正伊賀の乱を含む一連の戦乱により一時的に伊賀国一円が荒廃し、集落や城館数が減少したのではなかろうか。また中世城館に関しては豊臣秀吉による城破令が出されている[伊藤 2007:836 頁]。これにより、多くの中世城館が取り壊された。しかし、現在もいくつかの城館が姿を残していることから城破は不徹底に終わり江戸時代以降も集落内における中心的な存在として残存したことがうかがえる。これらの城館跡からはIV b 型式期に後続する播鉢が出土している。この播鉢は鉄泥を施し、連房式登窯で焼成されているなどの特徴があり、それ以前の中世的な陶器とは一線を画している。これは連房式登窯の導入などによって工人集団や生産方法に大きな変化があった結果である。

2. 中世城館について

伊賀地域においては確認されているだけでも、600

以上の中世城館が存在する[村田 2007 : 760 頁]。伊賀においては守護大名の勢力が弱く、戦国時代になっても、伊賀一国を支配するような戦国大名は出現しなかった。小規模な土豪層が各地に自分の居館を築き互いに牽制しあう関係にあったのである。16 世紀代になると他国からの侵攻に対抗するため各地の土豪の連合体である惣国一揆が形成された。また、同一地区内に複数の城館跡が存在することも多く、仮にそれらの城館が同一時代に存在していたのであれば密接な関係があつと推察される。このことは『三国地誌』において、伊賀地域内に多数の城館跡があつたと紹介されていることから分かる。このような惣国一揆体制は天正伊賀の乱によって織田信長の侵攻に屈するまで継続された。本稿における集成においても多くの中世城館より信楽焼播鉢が出土している。伊賀における中世城館は軍事的施設としての機能はもちろん、土豪の普段の居館としても利用されていた。そのため、山城のように不便な場所にあるのではなく、河川沿いや街道沿いに立地していることも多い。

中世城館跡の中には菊永氏館跡、荒木氏館跡のように長期間にわたって安定的に各型式の播鉢を出土する遺跡がある。これは、それらの中世城館が長きにわたり存続していたことを示している。言い換えれば、一つの集落内において土豪が優位な地位を安定して保持し続けたということである。惣国一揆が形成される背景にはこうした土豪たちの存在があつたのだ。

3. 小結

上記で述べてきたように伊賀地域においてはII a 型式期に本格的に流通するようになり、III a 型式期をピークに以後、出土量、出土遺跡数ともに減少していく傾向がある。生産地である信楽での双胴式窖窯を用いた生産の拡大、近江における分布の拡大に相反する

形となっている。これは消費地である伊賀地域における何らかの事情であるのか今後検討していく必要がある。

また、時期によって分布に地域差があることがわかった。流通初期には柘植川、木津川流域に分布し、次第に服部川流域に広がり、伊賀全域に拡大していく、その後、柘植川、服部川流域での出土量が減少していく、伊賀全域で出土遺跡数が減少している。

すべての時代を通して伊賀北部に比べ伊賀南部における信楽焼播鉢の出土数量、出土遺跡数ともに少ないことも注目される。それにも関わらず、最初期段階であるⅠ型式期、次ぐⅡa型式期に伊賀中部、南部において出土が確認されていることは注目に値する。

伊賀南部は信楽からの距離が比較的遠く、初瀬街道を通して大和との交流も活発であった。そのため大和産瓦質播鉢が多く流入しており、信楽焼播鉢と競合する関係であったことが分かる。青山峠を越え伊勢国に入ると瀬戸・美濃産の播鉢が多数を占める信楽焼播鉢は少数派となる。このように国境付近においては常に競合関係にある品物の流通に関してせめぎ合いがあったのである。これは人為的な国境というものよりもむしろ地理的な山地や河川にその境界線を引くことが可能である。伊賀地域からは信楽焼播鉢に加え、大和産瓦質陶器播鉢、東播系播鉢、瀬戸焼播鉢、猿投系鉢、常滑焼片口鉢などが一定数出土している。それらが信楽焼播鉢とどのような相互関係があるのか考えることが今後の課題の一つである。また、同一の遺跡から生産地の異なる鉢類が出土することあり、どのような使い分けが行われていたのか検討する必要がある。

中世城館跡に関しては長期間にわたり安定して信楽焼播鉢を出土する遺跡もあり、惣国一揆の背景にある小規模土豪層の生活基盤の一端を垣間見ることができた。

Ⅵ. 流通経路

最後に信楽焼播鉢の流通経路について少し論じることとする。ただ、考古学的な手法において流通経路を明確に示すことが困難であるのは自明の理である。しかし、当時の流通構造の解明には生産地と消費地を結ぶ中間経路をはっきりとさせる必要がある。そこで、推測的部分を多く含むことにはなるが、地理的情報や古地図などを参考にしつつ、その復元に努めて、流通



図3. 御斎峠から見た上野盆地

経路に関する案を提示し、今後の研究の一助にしたい。

1. 陸上交通

木津川段丘によって信楽と伊賀は分断されている。そのため、信楽からの輸送手段としては人力・牛馬・荷車などが想定される。人力や牛馬ではある程度の悪路であっても運搬可能であるが、荷車は道幅や路面状態、傾斜などの要素に影響されるため、すべての道路において荷車が利用されたとは考えがたい。むしろ荷車が利用できるほど整備されていた道路はほとんどなかったのではないかと思う。次節において水運の可能性を提示するが、その理由は荷車の輸送に耐えうる道路は少なく、輸送効率を考えると水運の方がはるかに効率的であったからである。

信楽から、伊賀まで輸送するルートは多羅尾を通り、御斎峠(図3)を経て東高倉に下りてくる道が最も近い。または、桜峠を通り、丸柱へと抜ける道も存在する。両者とも伊賀北部の柘植川流域に下りてくることができ大和街道への接続も良いのでこのルートが用いられたと考える。白石峠・御用の木峠を越え槇山に抜ける道もあるが、南下し、大和街道に接続するのは不便であり、槇山や玉滝など伊賀最北端の集落に供給するときのみ利用されたのではないだろうか。

次に大規模な街道を利用した輸送である。前述のように伊賀地域には大和街道、伊賀街道、初瀬街道が主要な交通路として存在している。出土遺跡もこれら街道近くに多くが分布していることなどからも利用された可能性が高い。

2. 河川交通

伊賀には木津川とその支流である柘植川、服部川、名張川などが流れており、河川による流通を考える必要が生じてくる。中世伊賀における水運を示す資料が見つかっていない現状でその根拠を明確に示すことは不可能である。しかし、信楽焼播鉢出土遺跡の多くが河川流域に分布することや水運のほうが陸上輸送に比べ多くの物資の移動に適していることなどからも水運の可能性を提示しておくことは重要である。

上記分布でも見てきたように、伊賀地域における信楽焼が出土する遺跡の多くが、河川の流域に広く分布していることが分かる。盆地という地形的な制約の面からわずかに開けた河川周辺の平野部に住居を構えるというのは確かに考えられるが、それも決して河川流通を無視したものではなかったはずである。河川の最上流部まで輸送するのは困難でも流れの緩やかな中流域までは輸送に利用されたのではないだろうか。また、中世城館の多くが、河川流域に立地していることは軍事上の要所であると同時に経済上の重要な地点であったことは容易に想像がつく。船溜まり遺跡等が発見されていない現状では想像の域を出ないが、陸上交通と合わせて水運の可能性についても言及してみた。

VII. まとめ

これまで述べてきたように伊賀地域においては14世紀代より信楽の需要が始まり、当初は出土数こそ少ないながらも、柘植川、木津川流域を中心に伊賀北部、南部地域に広く分布していることが分かった。またⅢa型式期にその流入量が増加し、Ⅲb型式期にはピークを迎えるが、以後、伊賀南部を中心に全体的に出土数が減少する傾向を見せる。これは産地である信楽での生産量の拡大や近江国での流通量の増加に相反する結果となっている。これに関しては消費地である伊賀地域に何らかの原因があるように思われる。本稿ではその原因を解明するには至らなかったため今後の課題とする。

流通経路については不明な点も多いが陸路及び水路での輸送が行われていたのではないかと考える。本稿では播鉢についてその分布から流通について論じたが、播鉢以外の甕や壺といった器種の流通にも十分に当てはまるだろう。

本稿は分布、および流通に関して考古学的な証拠に

依拠し考察したものである。そのため当時の社会的制約を考慮していない部分がある。14世紀から15世紀にかけては荘園や寺社の影響力が強く、また15世紀後葉以降は惣国の影響もある。つまり、単なる地理的要因に基づく合理的な流通が行われていたとは言い切れない部分が含まれる。物流に関するコストは生産地から消費地までの距離による輸送コストのみならず、輸送中に発生する通行料や仲買人の数などに左右されるのである。今後はこれらの視点を含めた研究が行われる必要がある。

謝辞

本稿は筆者の卒業論文「信楽焼播鉢から見る中世伊賀の様相」を改編したものである。執筆に当たり、名古屋大学の梶原義実先生には厚いご指導・ご教授を賜りました。末筆となりましたがこの場を借りて深く御礼申し上げます。

註

- 1) 本稿において中世は信楽窯開窯から連房式登窯による施釉陶器の生産を開始するまでとする。およそ13世紀後半から17世紀初めにあたる。
- 2) 藤堂元甫により編纂された伊勢・志摩・伊賀三国の地誌。1763年に完成。

引用参考文献

- 石井智大 小林俊之 柴山圭子 2008「霧生城跡」『霧生城跡・中道遺跡』三重県埋蔵文化財センター 1-51頁。
- 伊勢野久好 駒田利治 1981「下り合遺跡」『県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』昭和55年度 三重県教育委員会 196-206頁。
- 板倉一光 新名強 1998「伊勢路道筋遺跡」『六地藏C遺跡・伊勢路道筋遺跡発掘調査報告書』三重県埋蔵文化財センター 8-13頁。
- 伊藤真昭 2007「中世 第七章 近世社会の胎動」『伊賀市史』第一巻 通史編 古代・中世 伊賀市, 825-900頁。
- 伊藤裕偉 2006「小泉氏館跡」『荒木・西明寺地内遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター 215-236頁。
- 稲垣良二 田坂仁 1985「青ノ代遺跡」『昭和59年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会 125-136頁。
- 井上喜久男 1987「伊賀地方出土の中・近世陶磁について」『菊永氏城跡発掘調査報告』阿山町遺跡調査会 43-69頁。

- 岡本武和 藤井尚登(編) 1987『菊永氏城跡発掘調査報告』阿山町遺跡調査会.
- 笠井賢治(編) 2000『上野城跡(2次)発掘調査報告』上野市教育委員会 / 上野市遺跡調査会.
- 片山博道(編) 2005『イシヤ(ハンシ)遺跡・長野東出遺跡発掘調査報告書』甲賀市教育委員会.
- 門田了三(編) 1986『滝野氏城址』名張市遺跡調査会.
- 門田了三(編) 1991『名張市夏見字下出糸川橋遺跡』名張市遺跡調査会.
- 門田了三(編) 1993『名張藤堂家邸跡』名張市遺跡調査会.
- 門田了三(編) 1997『米野氏城』大山田村遺跡調査会.
- 倉田 守(編) 1986『下郡遺跡発掘調査報告—第7次調査—』三重県教育委員会.
- 小林俊之(編) 2003『野添遺跡発掘調査報告書』三重県埋蔵文化財センター.
- 駒田利治 1980「神ノ木遺跡」『県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』昭和54年度 三重県教育委員会 107-130頁.
- 駒田利治(編) 1982『福地氏城跡発掘調査報告』三重県教育委員会.
- 柴山圭子 2007「清水北遺跡・清水北古墳」『伊賀の考古資料2』三重県埋蔵文化財センター 1-14頁.
- 竹田憲治 2007a「安田氏館跡」『伊賀の考古資料2』三重県埋蔵文化財センター 15-22頁.
- 竹田憲治 2007b「塚本館跡」『伊賀の考古資料2』三重県埋蔵文化財センター 22-28頁.
- 田坂 仁 1984「檀・柏原遺跡」『昭和58年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会 55-76頁.
- 館 邦典(編) 2002『法華堂西館跡発掘調査報告』上野市教育委員会 / 上野市遺跡調査会.
- 筒井正明 1994「川南D遺跡」『名賀郡青山町勝地～妙楽地・川南D遺跡・勝地中世墓群発掘調査報告書』三重県埋蔵文化財センター 4-8頁.
- 豊田祥三 2006a「宮ノ前遺跡」『荒木・西明寺地内遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター 7-47頁.
- 豊田祥三 2006b「荒木氏館跡」『荒木・西明寺地内遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター 63-87頁.
- 豊田祥三 2006c「西明寺三反田」『荒木・西明寺地内遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター 135-153頁.
- 中森英夫 駒田利治 1981「附編 城山城跡発掘調査報告」『恒岡氏城跡発掘調査報告』三重県教育委員会 13-15頁.
- 西澤裕幸(編) 1997『上野城跡発掘調査報告』上野市教育委員会 / 上野市遺跡調査会.
- 新田 洋(編) 1981『恒岡氏城跡発掘調査報告』三重県教育委員会.
- 仁保晋作 1985「観音寺遺跡」『昭和59年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会 137-170頁.
- 仁保晋作 蔭山誠一 木澤良昭(編) 1993『福地城跡発掘調査報告』伊賀町教育委員会.
- 萩原義彦(編) 2008『森庵遺跡発掘調査報告書』三重県埋蔵文化財センター.
- 畑中英二 2003『信楽焼の考古学的研究』サンライズ出版.
- 畑中英二 2007『続・信楽焼の考古学的研究』サンライズ出版.
- 福田典明(編) 1994『堂垣内遺跡発掘調査報告』上野市教育委員会 / 上野市遺跡調査会.
- 福田典明(編) 1997『蓮花寺跡推定地遺跡発掘調査報告』上野市教育委員会 / 上野市遺跡調査会.
- 福田典明(編) 1999『泥畑遺跡発掘調査報告』上野市教育委員会.
- 藤井尚登(編) 1999『杉田氏城跡発掘調査報告書』阿山町教育委員会.
- 舟越重信 1996「火山遺跡」『火山遺跡・山神遺跡・良福寺跡・高寺南遺跡』三重県埋蔵文化財センター 1-23頁.
- 穂積裕昌 1991「貝野氏館跡・高田氏館跡」『平成2年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告書—第3分冊—』三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター 95-102頁.
- 穂積裕昌 2006「有井遺跡」『荒木・西明寺地内遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター 99-134頁.
- 穂積裕昌(編) 2007『上後瀬遺跡発掘調査報告書』三重県埋蔵文化財センター.
- 前川依久雄 堀川敬二 増田博(編) 1998『堂垣内・大多田遺跡発掘調査報告』上野市教育委員会 / 上野市遺跡調査会.
- 増田博 館邦典(編) 1997『比土遺跡発掘調査報告』上野市教育委員会 / 上野市遺跡調査会.
- 増田 博(編) 1999『昭和63年度 三反田遺跡発掘調査報告書』上野市教育委員会.
- 松田久司(編) 1999『安場氏館跡発掘調査報告書』三重県埋蔵文化財センター.
- 水口昌也 1991「小谷遺跡」『鴻之巢遺跡・小谷遺跡・小谷古墳群』名張市遺跡調査会.
- 村田修三 2007「中世 第六章 第二節 中世の城と館」『伊賀市史』第一巻 通史編 古代・中世 伊賀市, 760-797頁.

- 森川常厚 穂積裕昌 竹内英昭 1991 「浮田・高賀遺跡」『平成2年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告書—第3分冊—』三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター 1—84頁.
- 森川常厚 1993 「箕升氏館（北城遺跡）」『伊賀国府跡・箕升氏館跡ほか』三重県埋蔵文化財センター 23-60頁.
- 森前 稔 1980a 「木津氏館跡」『県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』昭和54年度 三重県教育委員会 96—106頁.
- 森前 稔 1980b 「婦毛遺跡」『県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』昭和54年度 三重県教育委員会 131—134頁.
- 森前稔 早川裕己 田中喜久雄 1981 「西沖遺跡」『県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』昭和55年度 三重県教育委員会 115—153頁.
- 森前稔 伊藤久嗣 1984 「風呂谷館跡」『昭和58年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会 77—100頁.
- 山田猛 1980 「石神塚1・2号墳」『県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』昭和54年度 三重県教育委員会 146-148頁.
- 山田猛 1982 「野中城跡」『県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』昭和56年度 三重県教育委員会 69-75頁.
- 山田猛 1990 「下郡遺跡群出土の播鉢」『Mie History』三重歴史文化研究会 61-78頁.
- 山田猛 2013 『下郡遺跡—第1次~7次調査—』三重県埋蔵文化保存センター.